

雑誌「学文」

—最後の文芸雑誌—

鈴木 義昭

一九三四年五月一日、月刊誌「学文」第一卷第一期が発行される。聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』によれば、代表編集者は葉公超であったが、実質的には聞一多と二人による編集であった、と言う⁽¹⁾。或いは衆目の見るところでは、聞一多が編集していると思っていたふしもある。本稿では、雑誌「学文」について、聞一多との関わりを中心として、その顛末を述べてみたい。

*

*

陳夢家夫人、趙蘿蕤は、次のように言っている。

……他（葉公超）是同一多先生的好朋友；因為夢家（陳夢家）的關係，我和聞先生熟起來。聞先生創弁「学文」這個短命的雜誌時，讓我翻譯外國的文芸理論。

と。⁽²⁾「創弁」というのは、創始と運営の謂である。彼女は、後ろでも述べるように、この雑誌にハーデイの詩論を翻

訳している。⁽³⁾ ちなみに、発行人は余上沅であった。編輯所は、北平西郊外清華園学文編輯部、発行所は、北平万祝寺後身一号、学文發行部、印刷社は、大学出版社（清華大学か？）とある。⁽⁴⁾

聞一多は、一九三三年八月、青島から北京に戻ってきた。学園紛争の続いた国立青島大学を辞し、母校の清華大学で中国文学を講じるためであった。前々任校の武漢大学では、「西洋美術史」、「現代英米詩」を講じていた（一九二八〜一九三〇年）。翌一九九年、武漢大学に赴任してきた游国恩の勧めもあつて、『楚辞』研究に着手する。一九二七年には、『詩経』的性欲観、翌二八年には、「杜甫」を発表していた彼は、古典の世界に境地を開拓しようとする気持ちを持つていた。当時の同僚には、楊樹達、燕樹裳、謝文炳（廌名）、鄧以蟄、陳登恪（陳寅恪の弟）等がいる。⁽⁵⁾ 次
の青島大学では、「中国文学史」、「唐詩」、「名著選読」、「英詩入門」を担当することになった。校長であつた楊振声を始めとして、同僚には、梁実秋（図書館長、外文系主任）、趙大侔、杜光埏、譚葆慎、沈從文たちがいる。⁽⁶⁾ この両
大学での知己が後に、再び同じ職場で働く同僚となることもあつた。⁽⁷⁾

概ね、北京で活躍する学者・文学者で、胡適のメカネに合うことがその出発点であつたことは、沈從文大抜擢の例を挙げるまでもなく、聞一多もそうであつた。ここでは、彼らと胡適との関係を中心にして、その繋がりのおもしろさを述べておこう。

胡適と聞一多とは、一九二五、一九二六年、北京時代の「新月社」で、一九二七年、上海・南京時代の月刊「新月」で行をともしした同人でもあつた。一九三〇年の青島大学時代にも、胡適は、聞一多を中華教育文化基金会で自ら委員長を務める編訳委員会の委員に指名している。⁽⁸⁾ し、青島を訪れた時には、会食をともししている。⁽⁹⁾ また、一九三一年、梁実秋と二人で、胡適に『シェークスピア全集』翻訳を提案したこともあるが、計画倒れになり、実現を見なかつた⁽¹⁰⁾。この計画では、胡適は聞一多を「シェークスピア全集翻訳委員会」の主任に擬していたほどである⁽¹¹⁾。ちな

みに、徐志摩は「ロメオとジュリエット」を、葉公超は「ベニスの商人」を、陳通伯（陳源）は「お気に召すまま」を、聞一多は「ハムレット」を、梁実秋は「マクベス」を担当することになっていた⁽¹²⁾。この仕事は、後に台湾に渡つた梁実秋が一人で完成させている⁽¹³⁾。

朱自清は、その日記、一九三四年一月三十一日の条に、

聞一多等發起為唐亮請參画展，列名者十人，除公超，林徽音外皆清華人也。

と書く⁽¹⁴⁾。聞一多は、清華出身の画家、唐亮（仲明）の絵画展開催のための発起人となると同時に、絵画展のために説明書まで書いている。唐亮は、一九二六年卒業、フランスで絵画を学び、帰国したばかりであった。この時、聞一多は、朱湘の自殺問題、妻の家族の金銭問題、自分の学問の問題等があつて、苦境に陥つていた⁽¹⁵⁾。そこに現れたのが唐亮の絵画展の話であつた。彼は、饒孟侃に借金を申込むほど窮乏していたが、この展覧会に自らの朱湘への贖罪の気持ちと、未来への希望を繋いでいるかのようにあつた。そうした苦衷をうち明けられるのは、饒孟侃だけであつた⁽¹⁶⁾。

朱光潜は、梁宗岱たちとともに「読詩会」を主催する⁽¹⁷⁾。この会は、朱光潜が、

我在倫敦時，大英博物館附近有個書店專門賣詩，是個書店組織一個朗誦會，每週四為例會，當時聽的人有四五十人。我也去聽，覺得是種朗誦會，好，詩要能朗誦才是好詩，有昔節，有節奏，所以到北京後也涌起了朗誦會。

と述べるように、ロンドンの書店の「朗誦会」に倣った、同好の士が毎月一、二度ずつ朱光潜の家に集まって、中外の詩歌や散文を朗誦する会であつた⁽¹⁸⁾。朱光潜の住んでいた慈悲殿三号の地にちなんで「慈悲殿誦詩会」と呼ばれる。朱光潜は、一九三三年七月、イギリス・フランス留学から帰国と同時に、胡適の推薦で北京大学の教授となつたばかりであつた。沈從文は、

北平地方又有了一群新詩人和幾個好事者，產生了一個誦詩會。這個集会在北平後門慈悲殿三号朱光潜先生家中按时举行，参加的人实在不少。北大有梁宗岱、馮至、孫大雨、羅念生、周作人、葉公超、廢名、卞之琳、何其芳諸先生，清華有朱自清、俞平伯、王了一、李健吾、林庚、曹葆華諸先生，此外尚有林徽因女士、周煦良先生等等。

と言つて、主立つた人物を挙げる⁽¹⁹⁾。もちろん、自身も加わつていた。さらに参加者をその他の資料によつて補うと、

徐芳（北大）、冰心、凌叔華、肅乾、沈櫻、楊剛、除世驥、張兆和（沈從文夫人）、当時在北京的兩位英国詩人尤連・伯羅和阿立通等等。

がある。また、一説によると、さらに陳源が参加したとも言ふ⁽²⁰⁾。「誦詩会」のメンバーと天津「大公報・文芸副刊」のメンバーとの公式の合作の始まりは、姜建・呉為公編『朱自清年譜』、一九三三年一〇月一五日の条に、

午，宴客。在座有楊振蘭、梁宗岱、鄭振鐸、徐中野、朱光潜、李健吾、朱物華、葉石蓀、韋季斌等。

とある⁽²¹⁾ように、この日の会が一つの契機であったのではなからうか。「慈慧殿読詩会」の主立ったメンバーと鄭振鐸とが顔合わせをすることになる。それは、後の「学文」の投稿者を兼ねることもあった。鄭振鐸、孫大雨、周作人、朱自清、俞平伯、林徽因、冰心、沈從文を除く人々は、概ね次世代の人間であると言つてよいであろう。所謂旧世代の人々も熱心に出席している。同『朱自清年譜』は一九三四年五月二二日、一九三四年一〇月二九日、一九三五年一月二〇日、同二月一六日、六月三日、十一月一〇日、一九三六年四月二五日の各条に、朱自清が参加したことを記す⁽²²⁾。これは、朱光潜と朱自清とが一時期同じ学校で教鞭を執つていた縁にもよろう⁽²³⁾。ただ、朱自清が読詩会に出席した時は、聞一多も参加しなかった。

それよりも、北京で開かれた、天津「大公報」「文芸副刊」の編集打合会で二人が会つた可能性は高い⁽²⁴⁾が、いまは判然としない。姜・呉編『朱自清年譜』の一九三三年八月三十一日の条によれば、

午応楊振声、沈從文邀宴、商在『大公報』開闢「文芸副刊」事。在座有林徽因、鄭振鐸等。

とある⁽²⁵⁾。鄭振鐸と朱自清とは、ともに「文学研究会」の同人であつたし、楊振声は、北京大学の「新潮社」の同人であり、胡適・徐志摩・聞一多とも親しい関係にあつた。沈從文は、「新月社」同人であると同時に、「文学研究会」の同人も兼ねていた。聞一多は、この会にも出席していないようである。張菊香・張鉄栄『周作人年譜』によれば、朱自清は、彼らとの頻繁な会合を持つている。翌一九三四年二月二五日の条に、

午至豊沢園，赴『大公報・文芸副刊』之招，到着楊今甫、沈從文、俞平伯、鄭振鐸、葉公超、聞一多、卞之琳、巴金諸人。

とあつて、聞一多がこの会に参加したと書かれる⁽²⁶⁾。俞平伯は、朱自清・鄭振鐸と同じく、文学研究会の同人であり、巴金と沈從文とは友人であつた。同書の同年三月一七日の条に、

往豊沢園，赴『大公報』之招宴，到者楊今甫、沈從文、巴金、聞一多、余上沅、葉公超、鄭振鐸等。

とある。余上沅は、「新月社」同人であつた。以上のわずかな例からも、沈從文と鄭振鐸とがこの会にいずれも顔を出していることが分かる。前者が「新月」系と、後者が「文学研究会」系とを繋ぐコーディネーターでもあり、同時に実務も行つていた可能性が高い。朱光潜の「自伝」によれば、「京派」と「海派」について触れた後、「文学雑誌」について、

当時正逢「京派」和「海派」对壘。京派大半是文芸界旧知識分子、海派主要指左連。我由胡適約到北大，自然就成了京派人物，京派在「新月」时期最盛，自從詩人徐志摩死于飛機失事之後，就日漸衰落。胡適和楊振声等人想使京派再振作一下，就組織一個八人編委会，籌弁一種「文学雜誌」。編委会之中有楊振声、沈從文、周作人、俞平伯、林徽音、朱自清等和我。

と言う。これが後の天津「大公報・文芸副刊」の「詩特刊」であるが、聞一多の名前は見えない。この辺の錯綜した人間関係については、稿を改めてより詳しく論じたい。

* * *

雑誌「学文」は、あまりよく知られていないと思われるので、紹介の意味を兼ねて、以下、その目次等を掲げ、投稿者のごく簡単な経歴を付けておく⁽²⁷⁾。

創刊号：

この「学文」「創刊号」(総ページ数、一一八ページ。定価三角、以降終刊まで同じ)には、聞一多の作品の他に、饒孟侃の詩「嬾」、孫洵侯の詩「太湖」、孫毓裳の詩「野狗」、陳夢家の詩「往日」、楊振声の小説「一封通信」、季羨林の散文「年」、李健吾の訳文「薩郎宝(Salambo) 與種族」、卞之琳の訳文「伝統與個人的才能」(T. S. Eliot: Tradition and the Individual Talent) が掲載されている。

広告には、「外交月報」(第四卷第三期、「現代」(五卷一期特大号))、「独立評論」(第九十八号)、「美美摄影室」、「独立評論合訂本出售」の広告があり、「勘誤」(正誤表一筆者)、「奥付」が付せられている。しかし、何故か「巻頭言」の類はない。

○饒孟侃(一九〇二～一九六七)、江西の人。清華大学卒。詩人、評論家、大学教授。聞一多の親しい友人。

○孫洵侯(不明)。○孫毓裳(一九一〇～一九八五)。江蘇無錫の人。南開大学から清華大学に転じる。日本留学。

後に西南連合大学教授、清華大学教授。詩人・歴史学者○陳夢家(一九一～一九六六)。浙江の人。南京中央

大学卒。詩人、考古学者。西南連合大学、中国科学院考古研究所所員。『新月詩選』を編集する。聞一多の南京大学時代の学生。○楊振声（一八九〇～一九五六）、山東蓬萊の人。北京大学卒。アメリカ留学。西南連合大学、北京大学、東北人民大学教授。小説家。徐志摩の友人。○季羨林（一九二一～）。山東の人。清華大学卒。ドイツ留学。後、清華大学、北京大学教授。インド哲学・文学。○李健吾（一九〇六～一九八二）山西の人。清華大学卒。フランス留学。燕京大学卒。劇作家、小説家、翻訳家。文学研究会会員○卞之琳（一九一〇～）、江蘇の人。北京大学卒。西南連合大学、南開大学、北京大学教授。詩人・翻訳家・英文学者。靳以、何其芳、朱光潜等と雑誌を編纂]

第二号

「学文」第一卷第二期（総ページ数、一四四ページ）は、翌六月一日に発刊される。孟饒侃の詩「和諧」、何其芳の詩「初夏」、孫毓裳の詩「我回来了」、陳夢家の詩「往日」、廢名の小説「橋」、白萍の小説「哨子河的夜晚」、蓮生の小品「断思」、徐芳的一幕劇「李莉莉」、吳世昌の論文「魏晉風流與私家園林」、梁実秋の訳「莎士比亞論金錢」（節訳 Karl Marx・Nationalökonomie und Philosophie）、葉公超の論文「從印象到評價」、CH'EN CHUNG SHO（陳中舒か）の英文の論文「Su TUNG-PO, S LITERARY BACKGROUND AND HIS PROSE-POETRY」（「蘇東坡の文学的背景とその散文詩」）が収録されている。

広告等には、以下のようなものがある。「（「学文」第一期要目、「特価優待基本訂戸」（半ばにミシン目があり、購読の申し込み表にもなっている）及び「独立評論」（第一〇四号、要目）、「美美攝影室」（「北平攝影專家」のキヤプションあり）、「奥付」がある。

〔○廩名（一九〇一〜一九六七）本名馮文炳。湖北の人。北京大学卒。北京大学教授、東北人民大学教授。小説家。馮至の友人。○白萍（不明）。○蓮生（不明）。○徐芳（不明）○吳世昌（一九〇八〜一九八六）、浙江海寧の人。燕京大学卒。中山大学教授、社会科学学院文学研究所研究员。散文家、歴史学者。抗日雑誌を編集。○梁実秋（一九〇二〜一九八七）、北京に生まれる。清華学校卒。アメリカ留学。新月社の有力な社員。北京大学、北京师范大学教授。解放後は台湾に渡り、台湾省立師範学院教授。散文家、翻訳家、英文学者。聞一多の親友。○葉公超（一九〇四〜一九八二）、広東の人。ペイツ大学、エイモス大学卒。英仏に留学。清華大学教授。抗日時期、官界に転じる。〔新月〕同人。解放後、台湾に渡る。○陳仲舒 歴史学者。（不明）

第三号：

第三期（総ページ数、一二四ページ）は、七月一日に発刊される。方令儒の詩「月夜在鷄鳴寺」、臧克家の詩「元宵」、陳江帆の詩「拾鐘」、包乾元の詩「春」、沈夢家「往日」、胡適の小説「西遊記的第八十一難」、君薔的一幕喜劇「鬼哭」、中書君の論文「論不隔」、聞家駟の論文「披德萊萊爾一幾種顔色不同的愛」、曹葆華の論文・翻訳「詩的法典」(Edmund Wilson: The Canons of Poetry)、「詩の規範」)、聞一多の『詩経』研究「匡齋尺牘」(統)、編輯後記」が収録される。ここで注意しておかなくてはならないことがある。それは以下に述べるように、この号だけに「編輯後記」が付けられていることである。それは、次の通りである。

陳夢家先生的長詩「往日」共三章、第一二兩章已見本刊一二兩期。第三章的初稿曾在別處單獨發表、不過作者後來又修改了許多。本刊為原詩的完整起見、特將修正稿在本期披露出來、望讀者注意。

(一)

本刊決定將最近歐美文藝批評的理論，挾其比較重要的，翻譯出來，按期披露。第一期所譯的 T. S. Eliot, 「傳統與個人的才能」，本期的 Edmund Wilson: 「詩的法典」，都是極重要的文字。另有老詩人 A. E. Houseman: 「詩的名與質」的譯文一篇，擬在下期登載。

(二)

討論中國材料中的新聞問題的文章，我們決定以後也要逐期刊載。下期有唐蘭先生關於老子的論文一篇。胡適先生關於儒林外史的文章，也盼望它在下期中能與讀者相見。

(四)

聞家駟先生是專門研究波德萊爾的。本期所載的「幾種類顏色不同愛」是一篇長文中的一部分。其餘的部分以後都要在本刊發表。下次的題目是「波德萊爾與女人」。

(五)

本刊上期所載吳世昌先生的「魏晉風流與私家園林」一文，倒版時被手民誤排二頁，以致上下文不能連貫，這是本刊應對讀者抱歉的。這次我們特將該文重行排版，印成單行本，凡本刊的定戶，一律隨同本期附送一冊。

最近本刊接到北平燕京大學英文學系包貴思 (Grace M. Boynton) 教授來函，請求本刊允許她將上述吳先生的文章譯為英文。包教授研究中國園林多年，收集了不少關於中國園林的材料。根拠她說，她在美國國會圖書館和哈佛大學圖書館中所搜得的關於這個題目的英文和法文的著作，都沒有像吳先生此文這樣精審詳備的。她並且希望本刊

継続発表這類的専門著作。本刊已經徵得吳先生同意、允許包教授將該文為訳為英文。(以下の英文の手紙は省略)とある。

また、表表紙の裏に、「本刊啓事」が付けられ、

葉公超先生行即出国本刊編輯事務自第四号起暫由聞一多余上沅吳昌世三先生代行負責音此啓。

の文がある。

広告には、「独立評論」(「独立立論」と誤って印刷される)第一〇九号の要目、雑誌「十日談」(第三十五期)の目録、「華年週刊」(第三卷第二十九期)があり、「奥付」が付けられている。

〔〇方令儒(一八九七〜一九七六)、安徽の人。ウイシコンシン大学卒。青島大学、復旦大学などで教鞭を執る。女流詩人、散文家、学者。青島大学で、聞一多と同僚。〇臧克家(一九〇五〜)、山東の人。青島大学卒。同大で聞一多に師事。詩人。老舍、洪深、王照統と雑誌を編集。〇陳江帆(不明)。〇包乾元(不明)。〇胡適(一八九一〜一九六二)、安徽の人。コーネル大学、コロンビア大学大学院卒。「新青年」に発表した「文学改良芻議」は、文学革命の発端となる。北京大学教授、校長。駐米大使を務めた後、台湾に移住。詩人、学者。〇君薔(不明)。〇中書君(不明)。〇聞家駟(一九〇四〜一九九八)、湖北の人。聞一多の弟。フランス留学。西南連合大学、北京大学教授。フランス文学者。〇曹葆華(???)四川の人。清華大学卒。詩人。〕

第四期（総ページ数、一八〇ページ）には、胡適の「一篇新体的墓碑」（附挿図及後記）（図には、「中華民國華北軍第七軍団第五十九軍抗日戦死将士公墓碑」胡適撰、錢玄同書とある。碑文の後ろに後記が付けられている）、盧寿楨の詩「旱」、同「秋風」、同「楊柳結」、余坤珊の詩「秋葉」、劉振典の詩「仮使」、陳夢家の訳詩「白雷客詩一章」（William Blake）、殷炎の小説「牆」、沈從文の散文「湘行散記」、陳銓の翻訳、戯曲「父親的誓言」（赫伯爾 Friedrich Christian Heibel）、唐蘭の論文「老子時代新考」、李健吾の論文「布法與白居易」（Bouvard et Pecuchet）、聞家駒の論文「波特萊爾與女人——贈路人」（A une passante）、蘿蕤生の翻訳、論文「詩的名稱與性質」（赫思曼 The Name and Nature of Poetry By A. E. Housman 「訳者附記」あり）、余上沅の論文「高我德」（Noel Coward）（中葉に劇中の写真、文末に「附記」あり）が収録されている。

○錢玄同（一八八七〜一九三九）浙江の人。日本留学。「新青年」編集委員、北平師範大学教授。雑文家、学者。魯迅の友人。○盧寿楨（不明）。○余坤珊（不明）。○劉振典（不明）。○殷炎（不明）。○沈從文（一九〇二〜一九八八）湖南鳳凰の人。小学校卒。編集者を経て、胡適、徐志摩の推挽により、武漢大学、青島大学、西南連合大学教授。小説家、散文家。○陳詮（一九〇五〜）、四川富順の人。清華大学卒。アメリカ、オベリン大学で学士と修士を取得。武漢大学・清華大学・西南連合大学で教鞭を執る。小説家。劇作家。○唐蘭（一九〇〇〜？）浙江嘉江の人。北京大学・西南連合大学教授。中国文学専攻。○蘿蕤（？〜？）、本名は趙蘿蕤。燕京大学卒。陳夢家夫人。英文学者。聞一多・葉公超の学生。○余上沅（一八九七〜一九七〇）湖北の人。北京大学卒。カーネギー大学、コロンビア大学院で演劇を学ぶ。劇作家、演劇理論家。「新月」の同人。]

広告には、以下のようなものがある。「独立評論（第一一五号の要目）、「華年」（潘光旦主席）の語あり。三卷三十四期）、「外交月報」（第五卷第二期）、「虎雛」の出版予告（純文芸月刊創刊号十月一日出版）とある。裏表紙には、「学文」第一、二期の要目がある。また、この号の巻末にも、長期購読者の募集広告があり、編集者たちは四号で終刊する意図がなかったものと思われる。

* * *

ところで、先の朱光潜の回顧にもあったように、「京派」と「海派」という言い方がある。元来は、戯劇における北京と上海の風合いの違いを言ったものであった⁽²⁸⁾。それが一九三〇年代の始めの頃になると、文学・思想の上での違いをも含義するようになった。朱光潜の言い方もそうであるが、その傾力を得てきた「左連」関係の文学者を「海派」とする見方は、沈從文・杜衡が早いものである⁽²⁹⁾。文学関係においても、戯劇同様、「海派」ができれば、「京派」ができることになる。「新月社」同人、「文学研究会」同人でも、北京住んでいれば、「海派」ということになっていったものである。そうした「京派」の中心に胡適がいる。聞一多と胡適の関係は、さらに徐志摩を共通項に加えると、容易に結びつく。当時、聞一多に明確な自覚があったかどうかは定かではないが、一九四四年一〇月一九日に開かれた「魯迅逝世八周年紀念会」で、聞一多は、

……従前我們住在北平，我們有一些自称「京派」的学者先生，看不起魯迅，說他是「海派」放在眼上的。……

と述べている⁽³⁰⁾ように、後には自らも「京派」の一員であったとの認識に達していたのである。「学文」の代表編集者

であつた葉公超は、次のように當時を回想する。

……当初一起弁「新月」の一伙朋友、如胡適、徐志摩、饒孟侃、聞一多等人、由于「新月」雜誌和新月書店種種的原因已告停弁、彼此都覺得非常可惜；民國二十二年底、大伙在胡適家聚會聊天、談到在「新月」時期合作無間的朋友、為什麼不能繼續同心協力弁一新雜誌問題。

と。⁽³¹⁾ 胡適の家での雑談中に、「新月」及び新月社の停刊、閉鎖を惜しんだ人々の間から雑誌出版の話が出たとする。一九三三年末の胡適宅での会に聞一多及び林徽因が出席していたかどうかは、はっきりしない。聞一多は、三月一日付けの饒孟侃への手紙の中で、次のように言う。

……刊物已改名『学文』（行有余力則以学文、在態度上較謙虛）。本星期日我與公超聯名請客、許多瑣細事、屆時可作最后的決定。……。

と。⁽³²⁾ ほとんど数ヶ月の間に、抛金活動や原稿募集、印刷所の決定を始めとする様々な実務的作業が開始されたことになる。こうした、拙速とも思える出版は、「学文」の短命さを象徴するかのようであつた。

さらに、四月二十四日付けの饒孟侃への手紙には次のように書く。

「学文」畢竟付印了、原擬五月一日出版、現恐須稍遲數日。詩欄一部分寄上一閱、想你必等得發急了。本期我朋

友中、唯你我兩人有稿。実秋因正式文章来不及写，寄来短短一篇翻译，上沅一文洋洋数千言，废话居多，皆不曾登載，公超則因文雖做完，自覺不滿意，故亦未出台。結果我自己非売力不可。写了一篇關於『詩經』的文章，不滿意也得拿出手。

と。⁽³³⁾ 聞一多は、友人たちの創作や論文が掲載できないので、やむなく『詩經』関係の論文を出稿したが、満足のものではなかった、と言う。謙辞であると同時に、自派の人たちの投稿が少ないことに對する遺憾の思いもあつたのであろう。これは、所謂「京派」がいくつかの派の連合体であつたことを端無くも物語っている。

「学文」は、こうして四号でその生命を閉じる。葉公超が

现在想起来，仍觉得可惜。「学文」出刊到第三期的时候，大家湊湊錢已經用光了，所以后来勉强弃完第四期，就再也無力繼續出刊。

と述べる⁽³⁴⁾ように、金銭的な問題が一番の障害になつたものであろう。同人たちが資金を出し合うにしては、寄せ集めによる結束感の薄弱さは否みがたく、集金能力も低下していたものと思われる。それに、「新月」には、徐志摩というスーパーバスターがいたのに対して、聞一多、葉公超は、文壇では地味な存在であつた。求心力が弱かつたと言える。しかも、葉公超が海外に行き、その一人が抜けてしまったのである。前述したように、聞一多には、かつて「詩鐫」時代に見せた情熱が失せていたことも事実である。胡適たちの肝煎りで始めた事業ではあつたが、その所期の目的を果たしたとは言えない。時代的にも、日本の中国侵略は激しさを加え、純文学的なものよりも左右どちらにせよ、

旗幟鮮明であることが求められていたことも事実であろう。「左連」系の雑誌に対抗するには、この雑誌は個性が淡白であった。政治的なものは一切掲載されておらず、学術的な雑誌の雰囲気さえ漂わせているのである。それゆえ、抗日戦争に突入するまでに生まれた所謂「三号雑誌」になってしまったのである。その点が実に惜しまれる。しかし、執筆陣は一流であり、後に一家をなした人物が揃っていることは八八頁以下に挙げた目次及び執筆者の略歴の通りである。問一多はそうした各派の合同における一種の象徴であったとすることができよう。

注

- (1) 聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』（湖北人民出版社、一九九四年七月）、一九三四年五月一日の項（p.454～1.9～11）に『学文』月刊第一卷第一期出版。編輯署名葉公超、而実際上は葉公超与先生兩人合編とある。
- (2) 趙蘿蕙「憶葉公超老師」——代序『葉公超批評文集』陳子善編、珠海出版社一九九八年一〇月）p.1、1.7～9。
- (3) 中国社会科学院近代史研究所蔵同誌による。以降、「学文」の引用等は全てこの複写を用いることにする。
- (4) 本稿、八八頁参照。
- (5) 聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』 p.373、1.2～3。
- (6) 西南聯合大学を例に取るならば、楊振声・葉公超・朱自清・游国恩・陳夢家・沈從文・卞之琳・朱光潜等枚挙に暇がない。『国立西南聯合大学史料』四「教職員卷」（北京大学 清華大学 南開大学 雲南師範大学編 雲南教

- (7) 育出版社一九九八年)等による。聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』p.388、1.18～22。
聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』p.388、1.20、21、22。
議決聘任丁文江、趙元任、傅斯年、沈寅格、梁実秋、陳源、聞一多、丁西林、姜立夫・胡先驥、王璉、胡絳甫、竺可楨為編訳委員会委員(「中華教育文化基金董事会第六次報告」)
とあるのによる。
- (8) 聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』p.400、1.1～3、2。
是月胡適來青島、与先生、梁実秋商議翻訳沙莎士比並著作事、并応邀在青島大做「山東在中国文化里的地位」講演。
胡適講演的那天晚上、青島大学設宴款待。……
とある。
- (9) 聞黎明『聞一多伝』(人民出版社、一九九二年一〇月p.133、1.1-13) p.
編訳委員会成立后、胡適擬定了一個計画、準備成立一個翻訳沙莎士比亞全集的専門委員会、由聞一多任主任、成員有徐志摩、葉公超、陳源、梁実秋、共五人。其工作為担任翻訳及審査、并先行試訳、以期決定体裁問題。為此、胡適曾写信与聞一多、梁実秋仔細研究過、聞一多也做了初步的計画、他自己分工從『哈姆雷特』入手、余計五年以內完成沙集。对這項工作、聞一多是熱心的、但因時局不靖、未能進行、倒是梁実秋自此開始、多年后独自訳完沙集。
と述べている。
- (10) 注(9)に同。こ。

(11) 胡適の書簡「復聞一多、梁実秋」に、

(附記) 全集必如何分配，可于第一次年会決定。現為進行便利計，先每人認定一種，立即試訳。現假定每人試訳一種如下：

徐志摩 *Romeo and Juliet*

叶公超 *Merchant of Venice*

陳通伯 *As You Like It*

聞一多 *Hamlet*

梁実秋 *Macbeth*

とある(耿雲志・欧陽哲生編『胡適書信集』(上) 北京大学出版社、一九九五年九月 p.540' 1.27~p.541' 1.1~4)。

(12) 朱喬森編『朱自清全集』第九卷(江蘇教育出版社、一九九七年九月)、「日記(上)」p.279' 1.1~2。(17)と同。

(13) 『聞一多全集』Vol.12「書信・日記・附録」所收の「致饒孟侃」(一九三四年一月一日付)に、

……子沅死的消息当然早知道了罷？前回你同我要不要寄錢給他，我勸你不要寄。当然寄了給他，不見就救了他的命，但我總覺得不安，彷彿我給你建的那議応負点責任似的。理智的説法，誠然這不是事实。但朋友死了，而且死的那樣，總不免令人動感情。子沅已經死了，不必談了。

とあって、朱湘問題に触れる(同書 p.271' 1.4~8)。家庭の問題にこゝに、同じく「致饒孟侃」に、

……李効泌目下大概也很窮，無法替他籌這筆路費。我自己呢，說起來話長了。四個孩子的家庭已經夠我受了，

再加上每月貧給家里寄四十元，給岳家寄三十元，而岳家的境況更是一言難尽。本来自岳父死后就常常靠典当

度日、最近一個舅兄不務正業、弄到下獄了。我若不寄錢去，一家人就得餓飯——真正飢飯。

つある（同書、p.272、1.3、8）。前年の九月二十九日付けの「致饒孟侃」には、

総括的講、我近来最痛苦的是發見了自己的映吼一押最根本的映陷一不能通產不壞。国力速樺・向内外炭展的路既走不風我就不能不特向内走、在速向内走的路路上・我却得着一十大安慰、困力我実証了自己在向内的路上。根有産展的希望。国力不能向外走兩道得我把向内的路走通了，達也可說是塞翁失礼是福而非禍。

つある（同書、p.265、1.6～11）。

(14) 「致饒孟侃」に、

在北平的朋友都膏・根本我也没有几十通有充的朋友。没有力、法，不得不求政千体！朋友爪死的死，努的努，我自己速九年也修倒考了。

つある（同書、p.272、1.22～23）。

(15) 「慈慧殿読帝会」が一九三三年のいつ頃から始まったのかはしたかあまりはつきりしていない。朱光潜の帰国と共に始まったとすれば、同年の七月からと言うことになるが、あまりにも急すぎる。『朱自清日記』十月三日の条に、

晚飯在振鐸处、商文学季刊事。朱孟英已到平。

つある（p.254、1.5）のど、秋になって始まったと考えるのが自然であろう。今は、詳しい時期については、未確定の要素として処理する。

(16) 『朱光潜全集』第一卷所収の「作者自伝」(『朱光潜全集』編集委員会編 安徽教育出版社、一九八七年八月)、p.5、1.16、19。

- (17) 『沈從文文集』(国内版) 第十一卷(花城出版社・生活・讀書・新知三聯書店、香港分店一九八四年)「文論」所収の『昆明冬景』中の「談朗誦詩」(一点歴史的的回策溯)、p.251、16~12。
- (18) 商金林著『朱光潜与中国现代文学』(「朱光潜研究叢書」安徽教育出版社、一九九五年十二月)、第八章「慈悲殿三号的“誦詩会”」には、
- 参加の人実在不少，北大有梁宗岱、馮至、孫大雨、羅念生、周作人、葉公超、廢名、卞之琳・何其芳、徐芳等；清華在朱自清、愈平伯、李健吾、林庚、曹葆華等；此外述有冰心、凌叔華、林徽因、周煦良、肅乾、沈桜、楊剛、陳世驥、沈從文、張兆和以及當時在北京的兩位英國詩人尤連・伯羅和阿立通等等。
- とある。
- (19) 戴逸主編「二十世紀中国著名学者伝記叢書」王攸著『朱光潜 學術思想評伝』、四、「執鞭高等学府(一九三三~一九四九)」一、「進入京派文化圈」に、
- 拋其他材料，這個名單速還应包括愈平伯、冰心、凌叔華、陳西滢、肅乾、徐世驥、孫毓裳、方令儒、程鶴西、張兆和、楊剛等人。
- とある(北京図書館出版社、一九九九年八月、p.54、1.11~15)が、典拠を明らかにしていない。
- (20) 朱喬森編『朱自清全集』第九卷、「朱自清日記」(上) p.256、1.21~23によろ。
- (21) 一九三四年五月二二日の会については、当日の日記には見えず、翌二三日の条に、
- 昨晚举行吟誦会……。
- とある(同書、p.293、1.6以下に見える)。翌一九三五年一月二〇日の会については、
- 下午訪周 CJ，并同去朱孟実家。

とある（同書、p.343、1.16以下に見える）。六月三日の会については、
参加朱孟実之朗誦会。

とある（同書、p.364、1.5に見える）。十一月十日の会については、
進城参加朗誦会。

とある（同書、p.389、1.10に見える）。一九三六年四月二五日の会については、日記には記載がない。

(22) 姜建・呉為公『朱自清年譜』の一九二四年三月下旬の項に、

 苧寧波世浙江省立第四中学校校長兼上虞県白馬湖私立春暉中学校校長享頤之聘、只身前往上述兩校任教。…
 点同在春暉中学任教的有夏丐尊、豐子愷、……朱光潜等人。

とある。

(23) 姜建・呉為公編『朱自清年譜』 p.245、1.2、4。

(24) 張菊香・張鉄栄編著『周作人年譜』 p.442、1.11～13。

(25) 張菊香・張鉄栄編著『周作人年譜』 p.443、1.14～15。

(26) 『朱光潜全集』第一卷「作者自伝」、p.5、1.16～21。

(27) 主として、陸耀東編著『中国现代文学大辞典』（高等教育出版社、一九九八年八月）による。

(28) 蘇汶「文人在上海」には、

 「海派」這兩個字大概最流行于平劇界…

とか、曹聚仁『「海派」三題』には、

 「京派」和「海派」本來是中国戲劇上的名詞，京派不妨說是古典的，海派也不妨說是浪漫的；

とある。いずれも、馬逢洋編『上海：記憶与想象』（文匯出版社、一九九六年二月）所収のものによる。前者は、p.9' 1.5' 後者は、p.17' 1.11' 12'。

(29) 沈從文は「論『海派』」の中で、

最近一期的「現代」雜誌上、有杜衡先生一篇文章，提到「海派」這個名詞。

と言う。注(14)に挙げた馬逢洋『上海：記憶与想像』p.11' 1.1-4)が、この語がよく知られるようになるのは、魯迅との論戦が巻き起こったからのことである。

(30) 『聞一多全集』二、「散文・雜文」所収、「在魯迅逝世八周年紀念会上的講話」、p.392' 1.5'。

(31) 李子雲等主編、陳子善編『葉公超批評文集』（珠海出版社一九九八年十月）所収「我与『学文』」、p.255' 1.9~14' による。

(32) 『聞一多全集』十二「書信・日記・附録」所収「致饒孟侃」、p.274' 1.1~30

(33) 『聞一多全集』十二「書信・日記・附録」所収「致饒孟侃」、p.275' 1.2~8

(34) 陳子善『葉公超批評文集』所収「我与『学文』」、p.257' 1.2' 40

なお、本稿は、論文『学文』を巡って——聞一多と林徽因の立場から——（二〇〇一年四月 早稲田大学日本語研究教育センター「紀要」四号所収）を基にして、二〇〇五年六月、聞一多学会で発表した草稿を勘案して改稿したものである。